コメントと討議

『コンパス』新聞社の編集方針
オンラインの活用を中心に

ペピ・ヌグラハ　コンパス・メディア社
Pepih Nugraha (Kompas Media Nusantara)

津波から7年後を迎えたアチェで報告する機会をいただいたことに感謝します。私自身は2005年1月、ジャーナリストとして津波の直後にアチェに来て取材をしました。今日はインドネシアで最大の新聞社で、オンラインでも国内で最大の影響力をもつコンパス社が、祖国の災害対応においてどのようなことをしてきたのかを中心にお話しします。

紙で発行している新聞の『コンパス』(Kompas) と、オンライン上で展開している『コンパス・ドットコム』(Komaps.com) の両方について、相違点などを含めてお話ししたいと思います。新聞としての『コンパス』は古い歴史をもっていますが、Kompas.comがオンラインのニューズ・メディアとなるのは1990年代後半に入ってからのことです。

私自身はもともと紙の『コンパス』を担当していましたが、その後オンラインのKompas.comの仕事もすようになりました。おそらくみなさんは不思議に思っていると思いますが、紙の『コンパス』とKompas.comはいったいどのような関係にあるのでしょうか。

二つの関係を一言でいいますと、Kompas.comは、紙の『コンパス』を利用しながら、それを通じて紙の『コンパス』を支えている関係にあります。例えば、紙の『コンパス』に「炎の輪」という特集企画があります。これはインドネシア中に点在する火山に関する特集です。紙の『コンパス』の企画ですが、Kompas.comも活動を支援していますし、この企画を通じて人材の育成も行なっています。

議論、読者、情報へのアンテナ、見せ方——Kompas.comの四つの戦略

2005年にアチェで津波が起こったとき、Kompas.comと『コンパス』はそれぞれ別に動いていました。私がアチェで津波被災後の様子を取材したときは、Kompas.comに記事を書くことと紙の『コンパス』に記事を書くことはそれぞれ別の活動でした。

ここでわが社の秘密を少しだけ明かしてみたいと思います。オンラインを活用する私たちKompas.comの戦略は、四つのポイントがあります。一つめは「Magnify」(議論の展開) です。紙の『コンパス』に載った記事をオンライン上で引き続き議論し、展開していきます。場合によっては記事の内容が追加されることもあります。

次は「Completion」(読者による補完) です。紙の『コンパス』の記事がそのままオンライン上で公開されることで、オンライン上でtwitterやコメントなどのかたちで記事をめぐる議論が活発に展開することがあります。これによって情勢の方向が変わったり、紙の新聞に載せる記事のつくり方が検討されたりします。

三つめのポイントは「Observer」(情報へのアンテナ張り) です。インターネットを通じた情報発信をしていると、現在どのようなことが話題になっているのかをコンパス社が直接把握できます。たとえば、大統領一行が飛行機で出かけるときに息子を待っていたために一行の出発が遅れたことがありましたが、インターネットなどを通じていちはやく察知することができました。

最後のポイントは「Presenter」(見せ方の工夫)です。インターネット上でアクセスが多い時間帯に関心の高い記事を掲載することで、より広く読者に読んでもらうことができます。

速報性があり、分量に限界がなく読者との距離が近いことが特徴

オンライン上で展開されるさまざまなコメントやそれに関連するtwitterをみていると、現在どんなことが話題になっているのか、またこれからどのようなことが問題となるのかをいちはやく見つけることができます。twitter上で話題となっていることを観察することで、なにを記事にするか考えることもあります。中国で地震が起こったことも、その地域の人々がウェブにあげて、それをもとにBBCが報道するといった動きを、インターネットを通じてリアルタイムで把握す

ることができました。

Kompas.comにはさまざまな特性があります。まず速報性があります。また、いつまでもどれくらいの量でもどんどん記事を入れることができ、紙の新聞と違って限界がないことも特徴です。そのほかにも、オンラインからさまざまなメディアに展開しやすいこともありますし、読者との関係が密であるともいえると思います。

55人の専属記者と17人のフリーランスの記者が不休で災害報道に対応

最後に、紙の『コンパス』とKompas.comの違いについて簡単に紹介します。編集会議をする日がそれぞれ違います。記者は、紙の『コンパス』には216人の記者がいて、毎日必ず『コンパス』に記事を送らなければいけないという義務があります。一方、Kompas.comには55人の専属記者と17人のフリーランスの記者がいます。現在では、Kompas.comの記者は紙の『コンパス』に記事を書く必要はなく、Kompas.comのためだけに活動すればよいことになっています。

災害に関する記事や緊急時の記事については、私たちはいつでも対応できるようにしています。日曜であろうと祝日であろうと、災害が発生したら全力で報道する態勢を整えています。災害をはじめとする事件を報道するうえでは、たんにそれを興味や好奇心の対象として扱うのではなく、報道を通じてその地域の人びとの助けになればという考えでKompas.comは取り組んでいます。

東日本大震災に対しても哀悼の意をもっております。Kompas.comでは、東日本大震災を単に報道の対象とするだけではなく、寄附も受け付けて具体的な支援にも取り組んでいます。アチェの津波のときも、漁民に対する船の供与や学校の建設などの支援にも関わっていたことをお伝えしておきたいと思います。